

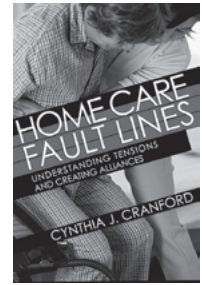
◆書評◆

Cynthia J. Cranford 著

Home Care Fault Lines

Understanding Tensions and Creating Alliances

(Cornell University Press 2020年 ISBN 9781501749254 \$ 26.95+税)



大野 恵理

(神奈川大学 法学部)

本書は、カナダ及びアメリカにおける高齢者や障がい者に対する個別生活援助(Domestic personal support: 介護、身体的介助や家事援助を含む)のケアプログラムについて、各地域の政策や事業運営組織、雇用主と労働者との関係性を比較分析し、労働市場と親密な労働における「柔軟性」と「安定性」を問うものである。比較対象となる4つのプログラムの分析を通じ、社会政策や社会運動内部の複数のアクターがいかに配置され組み合わせられているのか、それにより柔軟性と安定性の緊張関係や境界線はどのように連動し形成されているのかという点を明らかにしている。具体的には政治的イデオロギー、社会運動のダイナミズム、地域ごとの特性(エスニック・コミュニティや人種、階層など)を検討材料に含めながら、様々な

アクターの関与の程度を紐解いている。その上で、ケアを受ける人々とケアワーカー¹それぞれの求める柔軟性と安定性のある介助や介護、労働を実現させるための知見が明らかにされる。

本書の特徴として、被介護・介助者が直接ケアワーカーを雇用するプログラム(DFプログラム: Direct Funding Program及びIHSS: In-Home Supportive Service)と、営利/非営利のエージェンシーを介した雇用形態のプログラム(ホームケア Home Care 及び訪問家事支援事業 Service Attendants)といった様々な形式のプログラムが取り上げられている点あげられる。またケア労働の実態をとらえるための視点として「時間」、「業務(作業)」、「スキル」、「知識」が示され、それぞれの組み合わせによって緊張関係や

1 ここでは本書で用いられている「ケアワーカー」を使用する。著者によれば、「ケアは労働である」ことを強調するために用いられている。本書の文脈に沿い、訪問介護者や介助者、生活援助者、家族介護者を包括する用語として使用する。

安定的な労働について検討されている。また著者は10年以上にわたり、ケアプログラムの関係者や被介護・介助者、ケアワーカーなど300人以上の男女への聞き取り調査を行っている。様々な年齢層や障がいの種類、多様な人種や移民的背景をもつ対象者から聞き取った内容は、筆者の主張を支え議論の骨組みを形成するものとして随所に引用されている。とりわけケア労働における生活支援や身体的介助と、家事労働との境界線をめぐる議論では、現場の労働実態が被介護・介助者とケアワーカー双方の語りから具体的に示される。それにより、実態にそぐわない線引きがなされていることと、それが労働状況の悪化を引き起こしていることが明らかとなり、興味深い。

そして既存の家事やケア労働の研究と、高齢者や障がい者研究の知見の接合が試みられている点も大きな特徴といえる。既存のケア労働の研究で重視されてきたジェンダー、人種、エスニシティといったカテゴリーの交差性に、年齢、障がいという軸がどのように交差するのかという問題意識が全体に貫かれている。それにより、ケア労働を軸としながら極めて複雑で交差的な差別や抑圧の現実が描き出されている。さらに、既存の介護や介助支援に関する労働の研究では十分に取上げられてこなかった、被介護・介助者である高齢者や障がい者の感情的側面や関係性構築のための方略等についても視

野に入れられている。

時に表出する両者の緊張関係から目を背けることなく、検討材料として捉えなおそうとしている点は鋭く、その過程では、無意識な差別意識もまた浮き彫りになることが指摘されている。例えば、白人男女の被介護・介助者は、ケアワーカーに対し高い英語能力や「適切」とされるアクセントを要求しているが、彼らは人種的選好や移民に対する差別はしていないと認識しているという。これに対し著者は、特定の集団に関連する文化的な側面(アクセントやふるまい方など)もまた、長年にわたり人種差別の問題として議論されてきたと指摘している。ケアプログラムにおける潜在的な人種差別が親密な労働場面で対立や緊張をもたらし、ケアワーカーの安定的な就労を阻むと言及している。

本書は序章及び第1章から第7章で構成されている。序章では研究背景や本書の既存の研究における位置づけ、概念の定義、理論的枠組みが提示される。続く第1章と第2章では、北米におけるケア労働の歴史的背景とグローバルなケア労働移住をめぐる政策の変遷をおさえながら、人種、ジェンダー、年齢、障がいによる差別等の交差性の問題とケア労働の不安定化が提示される。そして被介護・介助者とケアワーカーの双方がともに社会的に不安定な立場にあることが示される。第3章から第6章では、既述のカナダとアメ

リカにおける4つのケアプログラムの事例を中心に、関係者やキーパーソン、対象者へのインタビューの事例に基づき構成されている。主に雇用関係(被介護・介助者とケアワーカーの直接/間接雇用)や中間エージェンシーの存在、プログラムの財政的な裏付け、ケアワーカーの組織化を軸としながら制度を分析している。第3章と第4章では、被介護・介助者が直接ケアワーカーを雇用する方法を採用しているプログラムとして、DFプログラム(カナダ・トロント)とIHSS(アメリカ・ロサンゼルス)、第5章と第6章ではエージェンシーが仲介するプログラムであるホームケア(カナダ・トロント)及び訪問家事支援事業(カナダ・オンタリオ)がそれぞれ検討される。そして終章である第7章では、全体の議論の整理や枠組みの再検討、今後の研究の展望について述べられている。

著者が提示した複数の分析枠組みによって、外部からは見えにくかった介護・介助労働の実態が詳らかになり、プログラムの制度的側面が批判的に検討される。例えば被介護・介助者は、ケアワーカーがプログラムの研修等により身に付けた「スキル」よりも自らの「身体知」に基づくケアの「スキル」を求めるという点や、制度上ケアワーカーに組織化のための権利が与えられないことで結果的にケ

アの質が低下しているという指摘は、制度の問題点として浮かびあがるものである。最終的には4つのプログラムの比較分析を通じ、新自由主義的なケアの論理が、いかに年齢、障がい、人種、ジェンダーなどの交差によって周辺化された人々に対して、経済的及び精神的負担を課しているかが明らかになる。それを乗り越えるために、社会運動のダイナミズムにもとづいた制度設計を重視することで、労働市場及び親密な労働場面における緊張関係が取り除かれ、柔軟性と安定性が同時に実現されるべきだと結論づけている。

全体を通して豊富な聞き取り調査の語りが見られ、被介護・介助者とケアワーカーの細かな感情の揺れ動きなど個々の事例については非常に説得的であるものの、ジェンダーや階級などの様々なカテゴリーの交差性を問うことを真正面から検討しているが故に、結論部分はやや理論的な検討に欠けると読むこともできるかもしれない。しかし様々なアクターや労働場面の交差性を丁寧に描写しようという試みによって、ケア労働における柔軟性と安定性の境界線自体が常に揺れ動かされるものであることを改めて認識させられもする、示唆に富んだ内容となっている。